

かかわりの中でお互いの学びを育てる体育授業

司会者	三宅 幸信
指導助言者	広島大学大学院教育学研究科助教授 松尾 千秋
	広島大学大学院教育学研究科助教授 東川 安雄

はじめに

私たちは、「生涯スポーツ」を根底において、生徒たちがこれからの社会の荒波の中を自分で泳ぎ切っていくだけの力、「生きる力」を育てようと授業実践に取り組んでいる。学年の発達段階に応じて、生徒同士のかかわり合いの中での学びを大切に、課題の設定、運動の実践、反省と新たな課題の設定を繰り返して運動を学習していくことで、自己の課題を主体的に解決する力が育つと考え授業を実践してきた。

今日生徒達をみていると、集団の中で自己を表現したり、他者との関係を結ぶことが、苦手な生徒が増えてきており、かかわり合いの中での学びを中心とした学習活動に、大きなエネルギーが必要となってきたのも確かである。遊ぶ場所など活動のスペースの減少やコンピュータやゲームの普及などからくる仲間との活動の時間の減少など様々な社会の変化により、集団での活動経験の減少が要因と考えられる。また、運動能力においてもスイミングクラブなどのスポーツ教室の普及により、一つの運動には秀でているが、他の種目は苦手な生徒も増えてきた。

今回は教科のテーマを「かかわりの中でお互いの学びを育てる体育授業」と設定し、競い合ったり、教えあったり、協力しあったりして仲間と活動する楽しさを味わいながら、運動技能を伸ばしていけるような授業のありかたを探っていきたい。

1. マット運動について

昨年度、高校2年生の女子で行ったグループマットを発展させ、高校1年生の男子にグループマットの授業を行う。昨年の実践では、グループで行うことで、課題とする技への挑戦や、お互いの関わり合いなど、意欲面でも技能面でも一定の成果が得られた。今回は男子を対象に、集団で演技を構成し発表する楽しさを味わえるようにしたい。グループを技能差のあるもので構成し、授業の前半については、できる技の連続技を技能差のある中で複数で息を合わせて練習することで、各自の技の質を高めていく。後半では、メンバーの特徴を生かした演技（約1分半）を構成し集団的達成感を味わえるようにしたい。その中で、個々の技能と学習意欲がより向上するようにな授業にしたい。グループの演技の中では、男子の持つスピード感やダイナミックさが生かしていけるようなプログラムを準備した。そして、グループでの演技を構成していく中で、課題解決のための練習方法を見つけ、工夫と挑戦を繰り返すことを通して、それぞれの技のポイントを発見・共有し、友だ

ちとアドバイスし合い励まし合いながら練習できるような授業にしたい。

2. 短距離走について

近年自分の身体がどのように動いているかイメージできていない生徒が増えているように思う。手を伸ばすことや膝を伸ばすことを意識させても「できない」「伸びていない自分の身体に気づかない」というように、自分の運動のイメージと身体感覚が合っていないことが多く見られるようになったと思う。走るということは運動の基本動作においても、地面を蹴ること、上半身を安定させること、腕でバランスをとることなど走り方にぎこちなさの見られる生徒が多くなってきた。今日の陸上競技の短距離走では、バイオメカニクスの研究により、関節や筋肉の使い方などの技術の再確認が行われてきた。それらを取り入れながら生徒の身体感覚（体の動かし方とその自覚）を育て、合理的な走る技術を身につけるようにしたい。授業ではペアをつくり、体の動きを確認し合うことで、お互いの身体感覚を高めながら技能をのばしていけるような授業をめざしたい。

3. 「サイエンスプログラム」について

保健体育科では先にも述べたように、「生涯スポーツ」を根底において、「生きる力」を育てる授業実践に取り組んでいる。学年の発達段階に応じて、課題の設定、運動の実践、反省と新たな課題の設定というサイクルを繰り返すなかで、主体的に課題が解決できる力を育てようと授業を実践してきた。課題の発見では、映像や具体的なデータなどから生徒が運動を科学的に分析し、自己の課題やグループの課題に気づき、その解決の道筋を工夫できるようにしてきた。運動実践においては、自分自身の体との対話や経験から得る実感を大切に納得のいくところまで、探求・検討が行えるようにしてきた。サイエンスプログラムの中で、そうした課題への主体的な取り組みを他者との関わり合いの中で実践できる力を育てる教材の開発をすすめている。

4. 分科会について

(1) 授業反省
器械運動（マット運動）の公開授業について

陸上競技（短距離走）の公開授業について

(2) 質疑と研究協議

(3) 指導・助言